J. Fac. Cul. Edu. Saga Univ.
Vol. 4, No. 1 (1999) 53～65

『高青丘集』「謝徽序」「周立序」「王彝序」訳注稿

古　川　末　喜

"GAO QINGQIU JI" 'XIEHUI xu', 'ZHOULI xu' and 'WANGYI xu' translated and annotated

Sueki FURUKAWA

本稿は、次の二篇につづく訳注稿の続編である。

1．『高青丘集』「鳧藻集本伝」「槎軒集本伝」訳注稿
（『佐賀大学文化教育学部研究論文集』第3集第2号、1999）

2．『高青丘集』「婁江吟稾序」「缶鳴集序」「姑蘇雑詠序」「胡翰序」「王禕序」訳注稿
（『佐賀大学文化教育学部附属教育実践研究指導センター紀要』第15号、1999）

本稿の体裁、形式、などについては前稿と同様である。本稿も前稿と同じく、入谷仙介先生（文学博士、島根大学名誉教授）に、原稿の全てを見ていただき、たくさんの手直しをしていただいている。ここに特に記して深謝の意を表します。

底本には、上海古籍出版社『高青丘集』上下冊（1985年刊）を用いた。

8「謝徽序」

8．1．0　原文

言之精者謂之文、詩又文之最精者。何以知其然耶。二氣爲之橐籥、而鼓之以風霆、然後天之聲出焉。衆竅爲之呼吸、而盪之以江湖、然後地之聲出焉。受形於兩間、而靈於物者、厖然氣至、渾然天成、發宣鴻鬱、然後人之聲出焉。凡人有聲、斯有言、有言、斯有文。文至於詩、包括品彙、陶冶化工、根乎性情之正、達於音響之妙、宮商間作、金石並鳴。由是而聲之用極矣。世皆知以詩而觀詩、或未知以文而觀詩。因謂詩特文章之末技。庸詎知聲成文、謂之音、而詩之中、文已具焉。韓退之之言曰、「李杜文章在、光燄萬丈長」。斯言也、其善論詩者已。然非天機悟入、識見超詣、亦何足以語此哉。

8．1．1　書き下し

言の精なる者、之を文と謂えば、詩も又文の最も精なる者なり。何を以て其の然るを知らんや。二気之が橐籥（タクヤク）と為りて、之を鼓するに風霆（フウテイ）を以てし、然る後に天の声出づ。衆竅（シュウキョウ）之が為に呼吸して、之を盪（アラ）うに江湖を以てし、然る後に地の声出づ。形を両間に受け、物に霊ある者、厖然（ボウゼン）として気至り、渾然として天成り、鴻鬱を発宣し、然る後に人の声出づ。凡そ人に声有らば、斯（スナワ）ち言有り、言有らば、斯ち文有り。文、詩に至れば、品彙を包括し、陶冶・化工し、性情の正しきに根づき、音響の妙に達し、宮商間（マ）ま作り、金石並び鳴る。是れに由りて声の用極まれり。世、皆詩を以て詩を観るを知るも、或は未だ文を以て詩を観るを知らず。因りて詩は

特（タダ）に文章の末技のみと謂う。庸詎（イズ）くんぞ知らん、声、文を成すこと之を音と謂い、詩の中に文已に具わるを。韓退之の言に曰く「李杜文章在り、光焰万丈に長し」と。斯の言や、其れ善く詩を論ずる者なり。然（シカ）れば天機悟入し、識見超詣（チョウケイ）なるに非ずんば、亦た何ぞ以て此を語るに足らんや。

8．1．2　通釈

言葉の最もすぐれたものをこれを文と言う。詩もまた文の最もすぐれたものである。どうやってそうであることがわかるのか。陰と陽とをふいごとなし、そこに激しい風と雷を送れば、その後に天の声が出てくる。たくさんの穴はそのために呼吸し、川や湖でそれを洗えば、その後に地の声が出てくる。天地の間に形を受けて、万物の霊長たる人間が、雑然として気が至り渾然として天が生じたあとに、大いなるその憂鬱を発散すると、その後には人の声が出てくる。おおよそ、人に声があるとそこから言葉が生まれ、言葉が生まれるとそこから文ができるのだ。文からさらに詩になると、事物のあらゆる品類を包括し、人間を薫陶し感化する。詩は正しい性情を根幹として、音の響きの絶妙な所にまで到達しており、美しい韻律が時として起こり、金石の楽器がハーモニーをかなで、このことによって音声の働きが最高に達しているのである。

ところが世間はみな、詩の観点から詩を見ることは知っていても、多くは文の観点から詩を見ることは知らない。だから詩はただ文章の末技にすぎないと言う。声に節まわしがつくとこれを音楽と言うのだから、詩の中には文がすでに具わっているというのに、誰もこのことを気付いていない。韓愈の言葉に「李白と杜甫の文章が存在し、その万丈にも達する光芒は永遠に尽きない」とあるが、この言葉は、ほんとうに詩をうまく論じているものだ。とすれば自然界の秘密を悟り、識見が超絶している者でないならば、詩を語る資格がないというものだ。

8．1．3　語釈

【二気】陰と陽。【橐籥】ふいご。『老子』第五章に「天地の間は、其れ猶お橐籥のごときか」とある。【鼓】ふいごで風を送る。【風霆】強風と激しい雷。【竅】穴。【江湖】静嘉堂文庫蔵『缶鳴集』（以下、静嘉堂本と略）は「江河」に作る。江河ならば、長江と黄河の意。この静嘉堂本との文字の異同は入谷仙介氏の作業によった。以下も同様である。【霊】神妙さ、すぐれた精神性をもつもの。『書経』泰誓上に「惟れ人は万物の霊なるものなり」とある。【厖然】乱れたさま。【渾然】入り混じったさま。【品彙】事物の種類と分類。【宮商】中国古代の音楽の五音中の宮と商。ここでは音楽の意。宋の厳羽の『滄浪詩話』詩評に「孟浩然（689-740）の詩は、諷詠することの久しかれば、金石宮商の声有り」とある。【庸詎】なんぞ。いずくんぞ。反語をあらわす。【韓退之】唐の文学者の韓愈(764-824)。退之は字。詩句の引用は、その「張籍を調（アザケ）る」の詩に見える。【李杜】唐の詩人の李白（701-762）と杜甫（712-762）。【光焰】光芒。光のほさき。【天機】天賦の霊感。【悟入】仏教語。真理を悟り、真理の中に入ること。【超詣】「鳧藻集本伝」の注を参照。

8．2．0　原文

渤海高君季迪、疎爽雋邁、警敏絶人、無書不讀、而尤邃於羣史。與余友二十年、余知季迪之能言也久、然未嘗不以其詩而得之也。始季迪之爲詩、不務同流俗、直欲趨漢魏以還、及唐諸家作者之林、每一篇出、見者傳誦、名隱隱起諸公間。及遊四方、不懈益勤、刮磨漱滌、日新月異、薦紳諸老、咸自以爲不及。季迪之於詩、誠精矣。然其意則自謂古風人之辭不如是也。三百篇之傳、豈皆出於一人之手。或著其一、二、皆

可以遺之後來、尚奚以多爲哉。吾非欲成一家言、亦性焉而嗜之之篤、殆與人之耽悅世好者、同一肆志留情、而其樂蓋未能以此而易彼也。聞者以爲然。

8．2．1　書き下し

渤海の高君季迪は、疎爽にして雋邁、警敏人に絶し、書として読まざるは無く、而も尤も群史に邃（オクブカ）し。余と友たること二十年、余、季迪の能言を知るや久しきも、然るに未だ嘗て其の詩を以て之を得とせずんばあらざるなり。始め季迪の詩を為るは、流俗に同じきを務めず、直だ漢魏以還及び唐の諸家の作者の林に趨らんと欲し、一篇出づる毎に、見る者伝誦し、名は隠隠として諸公の間に起こる。四方に遊ぶに及んで、益（マスマス）勤むることを懈らず、刮磨漱滌（カツマソウデキ）して、日に新たに月に異なり、薦紳の諸老、咸自ら以て及ばずと為す。季迪の、詩に於けるや誠に精なり。然るに其の意は則ち自ら古の風人の辞は是くの如からずと謂うなり。三百篇の伝わるや、豈皆一人の手に出でんや。或は其の一、二を著わすも、皆以て之を後来に遺すべく、尚お奚ぞ多きを以て為さんや。吾は一家言を成さんと欲するに非ず、亦た性として之を嗜むことの篤きこと、殆ど人の世好を耽悅する者と同一にして、志を肆にして情を留め、而も其の楽しみは蓋し未だ此を以て彼に易うること能わざるなりと。聞く者以て然りと為す。

8．2．2　通釈

渤海の高季迪は、率直で自由闊達な性格で、きわめて才知がすぐれており、人よりも断然頭の回転が早く、読まない書物は無いほどで、歴史書方面に最も造詣が深かった。私とは二十年来の友であり、私は季迪が言葉の表現がうまいこと知って久しくなるけれども、それは常に彼の詩を念頭においてそう考えているのである。はじめ季迪が詩を作るときには、世人と同じにならないようにつとめ、ただ漢魏以降と、唐の詩人たちの群れとだけを目指そうとした。詩の一篇が出きあがるたびに、見た者が人から人へと語り伝え、地位ある人たちの間で彼の名声がさかんにわき起こった。四方に出て見聞を広めるようになってからは、ますます努力をおこたらず、推敲に推敲を重ね、詩境は日々に新しく月ごとに異なり、読書人や地位の高い人たちは、みなみずからとても及ばないと思った。

季迪は詩においては、まことに精妙である。しかしその心は、古の詩人の作品はこうではなかったと彼みずから述べている。『詩経』の三百篇が伝わっているが、それがどうしてみな一人の作者によって書かれたものだろうか。その一、二を書いても、それをみな後来に残すことができるのだとすれば、それでもなおどうしてたくさん書くだろうか。私は一家言を立てたいと思っているのではない。生まれつきこれが大好きで、これへの打ち込みようと言ったら、世間的な楽しみをはなはだ好む者とほとんど同じで、思う存分に心をとどめ、しかもこの楽しみは世間的な楽しみで置き換えることができないほどなのだ、と。これを聞いた者はもっともだと思った。

8．2．3　語釈

【疎爽】闊達で率直。【雋邁】才知が極めてすぐれていること。俊邁に同じ。【警敏】敏捷。警も敏捷の意。【諸家】諸々の学派、専門家。【隠隠】盛んで多いさま。【諸公】地位のある人達。各位の社会的人士。【薦紳】搢紳に同じ。「槎軒集本伝」の搢紳の注を参照。【諸老】諸々の公卿大夫やその家臣たち。【風人】詩人。【三百篇之伝】三百篇は『詩経』に収められている詩の篇数の概数で、詩経を指す。伝は注釈の意で、詩経の場合はとくに漢初の毛亨・毛萇が伝えたとされる注釈・毛伝（『毛詩故訓伝』）を指す。【耽悅】ひどく愛する、好む。【世好】時代の流行。世俗の愛好するもの。

8．3．0　原文

當其一室燕坐、圖書左右離列、拂拭塵埃几案間、冥默覩思、神與趣融、景與心會、魚龍出沒巨海中、殆難以測度。或花間月下、引觴獨酌、酒酣氣豪、放歌作楚調、已而吟思俊發、湧若源泉、捷如風雨、頃刻數百言、落筆弗能休。故季迪之詩、緣情隨事、因物賦形、縱横百出、開闔變化、而不拘拘乎一體之長。其體制雅醇、則冠冕委蛇、佩玉而長裾也。其思致清遠、則秋空素鶴、迴翔欲下、而輕雲霽月之連娟也。至其文采縟麗、如春花翹英、蜀錦新濯。其才氣俊逸、如泰華秋隼之孤騫、崑崙八駿追風躡電而馳也。季迪之於詩、可謂能盡其心焉爾。

8．3．1　書き下し

其の一室に燕坐するに当たりて、図書は左右に離列し、塵埃を几案の間に払拭し、冥黙・覩思（セイシ）し、神は趣と融け、景は心と会し、魚竜の巨海中に出没するごとく、殆ど以て測度し難し。或は花間・月下に觴を引き独り酌み、酒酣にして気は豪に、放歌して楚調を作し、已にして吟思は俊発し、湧くこと源泉の若く、捷きこと風雨の如く、頃刻にして数百言、筆を落として休む能わず。故に季迪の詩は、情に縁り事に随い、物に因りて形を賦し、縱横に百出し、開闔（カイコウ）して変化し、一体の長に拘拘せず。其の体制の雅醇なるは、則ち冠冕の委蛇（イイ）にして、玉を佩して裾を長くするがごときなり。其の思致の清遠なるは、則ち秋空の素鶴、迴翔して下らんと欲して、軽雲に霽月（セイゲツ）の連娟（レンケン）たるがごときなり。其の文采の縟麗なるに至っては、春花の英（ハナブサ）を翹（ア）げ、蜀錦の新たに濯うが如し。其の才気の俊逸なるは、泰華に秋隼の孤騫（コケン）し、崑崙に八駿が風を追い電（イカズチ）を躡んで馳せるが如きなり。季迪の詩に於けるは、能く其の心を尽くすと謂うべきなり。

8．3．2　通釈

彼が一室でくつろいで座っている時は、書籍はその左右にならび、机の回りのほこりは掃き清められ、黙然と瞑想し、精神は詩趣と融合し、風景と心情とは一つのものとなり、魚や竜が大海の中に出没するようなもので、ほとんど推測しがたいものがある。あるいは花の間、月の下で杯を挙げて独り酌をし、酒たけなわになると気は豪快となり、大きな声で気ままに歌って楚の国ふうの歌を作る。かくて詩興は大いにそそられて、源泉のように尽きることなく湧き出で、風雨のように快速度で、わずかな時間に数百字も書き上げ、筆を取るや休むことができない。

だから季迪の詩は、心情によりそい、事柄どおりに従い、物のあるがままに形を詠じ、自由自在にあらゆる方面に出で、開いたり閉じたりして変化し、一つの得意な文体には拘泥しない。その形式が典雅でまじりけがないのは、高貴の方が鷹揚でゆったりとして、腰に玉を下げて長い裾を身につけた装いのようである。その境地が清く悠遠であるのは、秋空に白い鶴が旋回して飛び、いましも降下しようとするところに、薄い雲に明るい三日月が細く湾曲している情景のようである。修辞のはなはだ華美なことは、春の花が花弁をもたげ、蜀の錦が新たに濯われたかのようであり、俗にぬきん出たそのすぐれた才気は、秋の華山に空高く隼がひとり飛び、崑崙山に八匹の名馬が風を追い雷電を踏んで馳せて行くかのようである。季迪は詩において、十分にその心力を使いきっていると言うことができよう。

8．3．3　語釈

【燕坐】気楽に座る。何もすることなく座っている。【離列】羅列。離は羅列、陳列の意。【冥黙】物静かである。【覩】安静、平静。覩は静の字に通じる。【楚調】楚の地の曲調。宋の郭茂倩（カクモセン）の『楽府詩集』相和歌辞に「楚調曲」のジャンルがあり、「白頭吟」「怨歌行」などの楽府が収められている。

【吟思】吟情、吟懐などと同じで、詩情の意であろう。【俊発】詩才や文彩などが十分に表現されてくること。【縦横】静嘉堂本は「横縦」に作る。【開闔】開閉する。静嘉堂本は「開闔」に作る。闔も闔も、閉じるの意。【体制】様式。形式。【雅醇】典雅で純朴なこと。【冠冕】皇帝や官吏がかぶったかんむり。仕官にたとえる。【委蛇】おうようでゆったりしているさま。従容自得のさま。【佩玉】身分の高い官吏が腰の帯に下げた飾り玉。【長裾】すその長い服。官吏の服装を言う。【思致】作品の境地、興趣。【連娟】湾曲して細いさま。宋の蘇軾の「白鶴峰の新居成らんと欲し夜に西隣の翟秀才を過ぎる」の詩の其一に「連娟たる缺月、黄昏の後、縹緲たる新居、紫翠の間」とある。【軽雲】薄い雲。【霽月】明月。霽は晴れるの意。【縟麗】過剰なほどに華やかで美しい。【蜀錦】蜀の地で織られた色鮮やかな錦。【濯】蜀の成都では錦を織ったあと、長江の水で洗うとその模様がくっきりとし、織りあげた当初よりもかえって鮮やかになり、他の川の水よりは、長江の水がいいということである。

【俊逸】才能がとくにすぐれ垢抜けしていること。【泰華】中国の五岳の泰山と華山。または華山。いちおう華山と解した。この場合、泰は太に通じ、華山の大きさを賛美する修飾語。【秋隼】秋の隼。唐の劉禹錫の「楽天に重ねて『晩に冬青を達すに和す』の一篇を寄せられ、因りて再答を成す」の詩に「秋隼時を得て汗漫を凌ぎ、寒亀気を飲んで泥塗を受く」とある。【孤騫】ひとり飛翔する。騫は高くあがるの意。【崑崙】山の名。ここは、新疆とチベットの間にある七千メートル級の実在する山ではなく、中国古代に西方にあり、天への通路と信じられていた、伝説上の山を指す。静嘉堂本は「昆崙」に作る。【八駿】伝説上の周の穆王の八匹の名馬。周の穆王は八駿の馬車に乗り、崑崙山に登り、黄帝の宮殿を遊覧した（『列子』周穆王篇、また『穆天子伝』巻１、２）。【追風躡電】馬が疾駆することを形容する。追風逐電、追風躡景などとも言う。晋の葛洪の『抱朴子』内篇序に「假令（モシ）翅（ツバサ）を奮えば、則ち能く玄霄を凌厲し、足を騁（ハ）せれば則ち能く風を追い景を躡む」とある。【儒先君子】儒先は儒者先生の略、学者先生。君子は紳士、身分教養のある人。

８．４．０　原文

季迪之詩甚多、有『吹臺集』『缶鳴集』『江館集』『鳳臺集』、凡爲詩幾二千首、皆當世之儒先君子序其端。今年冬、予訪之呉淞江上。季迪出其詩示予。蓋取舊所集諸詩、益加刪改、彙粹爲一、總名曰『缶鳴集』。自古樂府・歌行而下、至五七言諸體、得詩九百餘篇、皆其精選、富矣哉。亦可謂不易矣。然是編也、特以今年庚戌冬而止、後有作、當別自爲集。季迪不以余不肖、屬余序之、庸敢序。諸篇端（一作末）以俟。季迪家姑蘇、嘗應召修元史、教西學弟子員、入翰林爲編修、擢戸部侍郎、賜歸鄉里云。洪武三年十二月既望、史官呉郡謝徽序。

【校記】『四部備要』依雍正本校刊本、此處有注云、「舊板『缶鳴集』作後序」。

８．４．１　書き下し

季迪の詩は甚だ多く、『吹臺集』『缶鳴集』『江館集』『鳳臺集』有り、凡そ詩を為るは二千首に幾し、皆当世の儒先君子が其の端に序す。今年の冬、予之を呉淞江の上（ホトリ）に訪ぬ。季迪其の詩を出だして予に示す。蓋し旧く集むる所の諸詩を取って、益（マスマス）刪改を加え、彙粹（イサイ）して一と為し、名を総べて『缶鳴集』と曰う。古楽府・歌行自り下、五七言の諸体に至るまで、詩九百余篇を得、皆其れ精選にして、富なり。亦た易からずと謂うべし。然るに是の編や、特に今年の庚戌の冬を以て止め、後に作有れば、当に別に自ら集と為すべし。季迪は余の不肖を以てせず、余に属して之に序せしむ、庸（イズク）んぞ敢えて序せんや。諸を篇端（一に末に作る）にして以て俟つ。季迪は姑蘇に家し、嘗て召に応じて元史を修め、西学の弟子員に教え、翰林に入りて編修と為り、戸部侍郎に擢んでられて、郷里に帰るを

賜うと云う。洪武三年十二月既望、史官の呉郡の謝徽序す。

【校記】『四部備要』の雍正本に依って校せし刊本は、此の処に注有りて「旧板の『缶鳴集』は後序に作る」と云う。

8．4．2 通釈

季迪の詩は非常に多く、『吹臺集』『缶鳴集』『江館集』『鳳臺集』などの詩集があって、おおむね二千首に近い詩を作っており、それらの詩集にはみな当世の儒者や紳士等が序文を書いている。今年の冬、呉淞江のほとりに彼を訪ねた。彼は詩を出してきて私に示した。それは以前からいろいろ集めていた詩をもとに、益し加えたり取捨選択して手を入れ、一つにまとめたものらしく、全体の名を『缶鳴集』と言った。古楽府や歌行体より以下、五言七言の諸体に至るまで、九百余篇の詩で、いずれも精選された、豊かな作品集となっている。これはまた得難いことだと言うべきであろう。しかしこの詩集は、とくに今年の庚戌の年（1370）の冬を下限として、それ以後作品ができれば、これとは別の詩集とするはずである。

季迪は私の不肖をかえりみず、私に序文を依頼した。私は序文などはおこがましいので、詩集の最後に書きつけて批判を仰ぐことにした。季迪は蘇州に住まい、かつて天子のお召しに応じて『元史』の編纂にたずさわり、学校で学生に教え、翰林院に入って国史編修の官となり、戸部侍郎に抜擢されたが、郷里に帰るのを許されたということだ。洪武三年（1370）十二月十六日、史官の呉郡の謝徽が序文を書いた。

8．4．3 語釈

【彙粹】集める。彙も粹も集めるの意。【総名】静嘉堂本は「総題」に作る。【古楽府】「槎軒集本伝」の注を参照。【歌行体】楽府体から発展した古詩の一体で、五言、七言、雑言など形式は比較的自由である。【九百余篇】第一次の『缶鳴集』は、高啓の「缶鳴集序」によれば、元の至正十八年（1358）から至正二十七年（1367）までの詩を集めたもので、七百三十二篇という。ここで、九百余篇というのは、本文に言うように、第一次の『缶鳴集』を増訂したもので、明の洪武三年（1370）までの詩を集めている。この三年間で、二百首近くが増えたことになる。【姑蘇】地名。今の江蘇省蘇州市。【西学】中国古代の周代の学校の名。下注の「弟子員」とともに、ここはわざと古い言い方を用いている。明初において具体的にどの学校を指すのかは不明。【弟子員】漢代の太学の学生を言う。太学は官吏養成のための中央の国立大学で、主に身分の高いものの子弟を教育した。「槎軒集本伝」では「諸功臣の子弟に教う」とある。「王禕序」の注を参照。【翰林…編集】「鳧藻集本伝」の注を参照。【既望】陰暦の十六日。既に望（満月）が過ぎたの意。【謝徽】「鳧藻集本伝」の注を参照。【後序】静嘉堂文庫蔵『缶鳴集』も同じく「後序」に作る。

9「周立序」

9．1．0 原文

先姑夫槎軒高先生、平生著述甚富、其詩則有『鳳臺』『吹臺』『江館』『青丘』『缶鳴』『南樓』『姑蘇』『勝壬』等集、文則有『鳧藻集』、詞則有『扣舷集』也、幾二千餘篇。

天資穎悟、志行卓越、當元季、挈家累、侍吾先祖仲達父、隱居呉淞江上、閉戸讀書、混跡於耕父釣叟之間、而與吾父思敬、諸父思齊、思義、思恭、思忠日相親好、酣暢歌詠、以適其趣。所賦者『江館』『青丘』等集、皆在是也。獨『鳳臺』一集、入我聖朝洪武初爲史官時作也。後選諸集中詩九百餘篇、總而名之曰『缶鳴』。時多好事者、欲爲板行、先姑夫恐其致聲益隆、乃止之。

9．1．1　書き下し

先（セン）の姑夫の槎軒高先生は、平生著述甚だ富み、其の詩には則ち『鳳臺』『吹臺』『江館』『青丘』『缶鳴』『南楼』『姑蘇』『勝壬（ショウジン）』等の集有り、文には則ち『鳧（フ）藻集』有り、詞には則ち『扣舷集』有り、二千余篇に幾し。

天資穎悟（エイゴ）にして、志行卓越し、元季に当たりて、家累を挈（タズサ）え、吾が先祖の仲達父に侍して呉淞江の上（ホトリ）に隠居し、戸を閉ざして読書し、跡を耕父・釣叟の間に混じ、吾が父思敬、諸父の思斉、思義、思恭、思忠と日に相親好し、酣暢（カンチョウ）して歌詠し、以て其の趣に適す。賦す所の者の『江館』『青丘』等の集は、皆是に在るなり。独り『鳳臺』一集は、我が聖朝の洪武の初めに史官と為る時の作に入るなり。後に諸集中の詩九百余篇を選んで、総じて之に名づけて『缶鳴』と曰う。時に好事者多く、為に板行せんと欲するも、先の姑夫は其の声を致すこと益隆（タカ）からんことを恐れ、乃ち之を止む。

9．1．2　通釈

すでに物故したおば夫の高啓槎軒先生は、生前の著述がはなはだ多く、詩では『鳳台』『吹臺』『江館』『青丘』『缶鳴』『南楼』『姑蘇』『勝壬』等の詩集があり、文では『鳧藻集』があり、詞には『扣舷集』があって、ほとんど二千余篇であった。

先生は生まれながらにして聡明で、こころざしと品行は人よりぬきん出てすぐれていた。ちょうど時は元の末世にあたり、家族を引き連れて、わが祖父の仲達翁のそばにつかえて呉淞江のほとりに隠遁し、戸を閉じて読書し、農夫や漁夫たちの間に入り交じって、その行跡は目立たなくした。そして私の父の思敬や、父方のおじの思斉、思義、思恭、思忠らと日々親密に交際し、酒を飲んで愉快になっては歌を詠じ、性向にかなった暮らしをした。そうやって歌ってできあがった『江館』『青丘』等の詩集は、みなこの時のものである。ただ『鳳臺』という詩集だけは、この聖代の洪武年間の初めに史官となった時の作に入る。後に諸々の詩集の中から九百余篇を選んでひとまとめにして、名づけて『缶鳴』と呼んだ。当時ちょうど先生の詩を好む人が多く、それを出版しようと欲したが、おじは名声がますます高くなることを恐れ、これをやめさせた。

9．1．3　語釈

【姑夫】父の姉妹の夫。おじ。【槎軒】高啓の号。【天資】生まれつき。資質。【穎悟】聡明。【志行】こころざしと品行。【家累】家族。または家中の財産。【父】ホと読む。甫と同音同義。老人の名につける美称。自称にも他称にも用いる。【耕父】農夫。静嘉堂文庫蔵『缶鳴集』（以下、静嘉堂本と略）は「耕夫」に作る。意味は同じ。この静嘉堂本との文字の異同が入谷仙介氏の作業によるのは「謝徽序」と同様である。以下も同じである。【釣叟】漁夫。【混跡】行跡を一般大衆の中に紛らせる。【諸父】叔父や伯父。【酣暢】心ゆくまで酒を飲む。または愉快になる。【好事者】静嘉堂本は「好者」に作る。【板行】木版に印刷して出版する。

9．2．0　原文

周立記髫年進侍几席、辱顧愛之、見其氣貌充碩、衣冠偉然、言論誦讀、音韻如鐘。靜處一室、圖書左右、日事乎著作、餘不暇顧也。時與嘉陵楊基孟載・潯陽張羽來儀・郯郡徐賁幼文、名重當世、人稱爲高楊張徐、比唐之四傑也。於乎、先姑夫迨今歿且二十餘年、不幸無後以傳。四方之士、莫不仰慕風裁、爭録其藁而傳誦之。然而傳寫之訛、不得眞者多矣。幸吾姑尚無恙、藏其手澤親藁在焉。因不揆庸陋、益加考訂校正、重

編足一千首、俾學子李盛繕寫成帙、用繡諸梓、貽於不朽。非惟以成吾先姑夫之志、抑且與夫學者共之矣。

至其詩之平易流麗、才之富瞻俊逸、大篇短章、備乎衆體、而自成家。則有太史公胡仲申・翰林待制王子充・國史編修謝元懿諸公、序而評之矣、愚不敢贅也。及鏤是編、同志之士、或有喜助之者、太原王震、則贈以板云。永樂元年秋七月初吉、後學周立謹識。

9．2．1 書き下し

立、髫年（チョウネン）にして几席に進侍し、之に顧愛せらるるを辱（カタジケナ）くするを記す。其の気貌は充碩（ジュウセキ）し、衣冠は偉然として、言論誦読は、音韻鐘の如きを見る。一室に静処し、図書を左右にして、日に著作を事とし、余は顧みるに暇あらざるなり。時に嘉陵の楊基孟載・潯陽の張羽来儀郯（タン）郡の徐賁幼文と、名は当世に重く、人は称して高・楊・張・徐と為し、唐の四傑に比すなり。於乎、先の姑夫今に迨（オヨ）ぶまで歿して且に二十余年ならんとし、不幸にして後の以て伝うる無く、四方の士、風裁を仰慕せざるものなく、争って其の藁を録して之を伝誦す。然り而して之を伝写して訛し、真を得ざる者多し。幸いに吾が姑、尚お恙無く、其の手沢・親藁を蔵して焉に在り。因りて庸陋を揆らず、考訂校正を益加し、重編すること一千首に足り、学子の李盛をして繕写して帙を成さしめ、用って諸を梓に繡し、不朽に貽す。惟だに以て吾が先の姑夫の志を成すに非ず、抑（ソモソモ）且つ夫の学者と之を共にせんか。

其の詩の平易・流麗、才の富瞻（フセン）・俊逸、大篇・短章に至っては、衆体に備わりて、自ら家を成す。則ち太史公の胡仲申、翰林待制の王子充、国史編修の謝元懿の諸公、序して之を評する有り、愚は敢えて贅せざるなり。是の編を鏤するに及んで、同志の士、或は喜んで之を助くる者有り、太原の王震は則ち贈るに板を以てすと云う。永楽元年秋七月初吉、後学の周立謹んで識す。

9．2．2 通釈

私は記憶しているが、幼い時に先生の身近につきしたがい、かたじけなくもたいへん可愛がられた。先生の風貌は気力に満ちあふれ、服装を正したときは堂々としており、談論したり朗読したりするときの声は、鐘のような響きだったことを見知っている。一室に静かに住まい、書物を左右に広げ、日々著作を事とし、その他は顧みるひまなどなかった。時あたかも嘉陵の楊基、潯陽の張羽、郯郡の徐賁らとともに、名声を博し、人々は「高楊張徐」と呼んで、唐代の「四傑」になぞらえた。ああ！おじは、亡くなってから今もう二十余年にもなろうとするのに、不幸にして男児がなくて、後に伝えるものがいない。四方の人士たちはみなその風格を慕い、争ってその作品を書き写し、朗誦し伝えていった。しかしながら、伝写の過程で誤りが生じ、原作と違うものを目にする人が多かった。好運にも私のおばが今でも健康で、おじ自筆の詩稿を手元に保存しておられる。そこで私はみずからの平凡さやあさはかさをかえりみず、校訂作業を繰り返し、一千首余りを編集しなおした。学生の李盛に清書させ糸綴じにして製本し、これを版木に彫って出版し、後世に永遠にのこすことにした。これはただ先生の志を成就することになるだけではなく、そもそもまた、それを慕い学ぼうとする者たちと、それを共有することにもなるのだ。

詩の平易さと流麗さ、才能の豊かさと非常にすぐれていること、そして長編と短編などは、それぞれ種々の文体に備わっており、おのずと一つの流派を成している。これについては、太史公の胡翰先生、翰林待制の王禕先生、国史編修の謝徽先生らが、序を書いて批評しておられるので、私のような愚か者は敢えてこれ以上よけいな言葉を費やさないことにする。この作品集を出版するに際しては、同好の人士で、喜んで援助してくれる人がおり、太原の王震氏は版木とする板を贈ってくれた。永楽元年(1403)、秋、七月一日、後学の周立がつつしんで記した。

9．2．3　語釈

【髫年】幼年。昔、子供が頭の上に結って後に垂らした髪を、髫と言う。【進侍】かしずく。【几席】ひじかけと座る敷物。【顧愛】大事にする。いたわる。【気貌】風貌。形貌。【充碩】充実している。碩は大きい、充実しているの意。【偉然】すぐれて際立っている。特異。『史記』留侯世家に「鬚眉（スビ）皓白（コウハク）にして、衣冠甚だ偉たり」とある。【嘉陵】嘉陵江を言う。四川省を流れる長江上流の大きな支流の一つで、重慶で岷江と合流する。上流の今の甘粛省徽県には前漢に嘉陵道が置かれた。ここで楊基の出身地を嘉陵とするのは正確ではない。楊基の原籍は、岷江沿いの嘉州（嘉定州。今の四川省楽山）である。【楊基孟載】明の楊基。孟載はその字。「鳧藻集本伝」の注を参照。【潯陽】地名。今の江西省九江市。【張羽来儀】明の張羽。来儀はその字。「鳧藻集本伝」の注を参照。【郯郡】地名。「王彝序」の注を参照。【徐賁幼文】明の徐賁。幼文はその字。「鳧藻集本伝」の注を参照。

【唐之四傑】「初唐四傑」のこと。初唐に活躍した王勃（648-675）、楊炯（650-693？）、盧照隣（634？-686？）、駱賓王（？-684）の四人のすぐれた詩人。【於乎】静嘉堂本は「於戲」に作る。意味は同じ。【無後以伝】中国では厳格な男子相続で、男の子がいないと、財産の継承者が途絶え、家が断絶する。祖先の遺稿を出版して、名声を世に広めるのは、相続人の重要な義務の一つ。【風裁】言論、挙止、姿態などを総合したもの。風度、風格。【幸】静嘉堂本は「茲幸」に作る。「茲」があれば「茲（ココ）に」と訓じる。「今」の意で「茲（イマ）」と訓じることもできよう。【手沢】直筆、親筆。著者本人の書いた原稿などをいう。静嘉堂本は「手筆」に作る。意味は同じ。【親藁】自筆の原稿の意であろう。【庸陋】平凡で見識が狭い。ここでは謙譲語として用いてある。【考訂】考証し訂正する。【校正】校勘し正す。【学子】学生。【李盛】人の名。伝は未詳。『八十九種明代伝記綜合引得』『明人伝記資料索引』に記載無し。【繕写】清書する。書き写す。【帙】線装本（糸綴じの本）のおおい。また線装本。【梓】版木。古く梓（アズサ）の木にきざんだのでこう言う。

【太史公】古く天文、図書を司った官の太史令の呼び方。司馬遷が太史公と呼ばれる。ここは、明初に『元史』編纂に参加した胡翰の職を雅やかにそう呼んだ。【胡仲申】明の胡翰。仲申はその字。「胡翰序」の注を参照。【翰林待制】官名。「王禕序」の注を参照。【王子充】明の王禕。子充はその字。「王禕序」の注を参照。【国史編修】官名。「鳧藻集本伝」の注を参照。【謝元懿】明の謝徽。元懿はその字。「鳧藻集本伝」の注を参照。【愚】自称の謙譲語。静嘉堂本は「己愚」に作る。だとすれば「己（オノレ）愚（オロ）かにして～」と訓じるのであろう。【王震】人の名。伝は未詳。『八十九種明代伝記綜合引得』『明人伝記資料索引』に記載無し。あるいは『大清一統志』松江府四に、楊基らと並んで記載される人物かもしれない。字は以東。蘇州の人で、洪武の初めに徴されて大祀楽を校した。後に華亭に移った。永楽の初めにまた徴されたが老疾をもって辞退した。

【初吉】陰暦のついたち（朔日）。【周立】人の名。伝は未詳。この後序によると、高啓の妻の兄弟の子である。呉寛序では兄の子、字は公礼とある。「呉寛序」の本文を参照。『明史』に記載無し。清の朱彝尊の『明詩綜』巻26に詩一首を収めるほか、『八十九種明代伝記綜合引得』には、『皇明海国功臣録』巻20『明人小伝』巻24に伝があるという。

10「王彝序」

10．1．0　原文

高季迪詩集、凡若干卷、郯郡徐賁所編次、而稽岳王彝題其帙曰高季迪詩集、而爲之序焉。

季迪嘗仕而顯矣。當未仕時、即以詩鳴、世有稱其作者、特以季迪而不以官。季迪之詩、不以仕而顯也。蓋季迪之言詩、必曰漢魏晉唐之作者、而尤患詩道傾靡。自晩唐以極、於宋而復振起。然元之詩人、亦頗沈

酣於沙陲弓馬之風、而詩之情益泯。自返而求之古作者、獨以情而爲詩、今漢魏晉唐之作、其詩具在、以季迪之作比而觀焉、有不知其孰爲先後者矣。

10．1．1　書き下し

高季迪詩集、凡そ若干巻は、郯（タン）郡の徐賁の編次する所にして、稽岳の王彝、其の帙に題して高季迪詩集と曰い、之が序を為る。

季迪は嘗て仕えて顕る。未だ仕えざるの時に当たりて、即ち詩を以て鳴り、世に其の作を称さるる者有るは、特（タダ）季迪を以てするのみにして官を以てせず。季迪の詩は、仕を以て顕るるにはあらざるなり。蓋し季迪の詩を言うは、必ず漢魏晋唐の作者を曰いて、而して尤も詩道の傾靡するを患う。晩唐自り以て極まり、宋に於いて復た振るい起こる。然るに元の詩人、亦た頗る沙陲（サスイ）、弓馬の風に沈酣（チンカン）し、詩の情益（マスマス）泯（ホロ）ぶ。自ら返りて、之を古の作者に求め、独り情を以て詩を為り、今、漢魏晋唐の作、其の詩具（トモ）に在り、季迪の作を以て比べて観れば、其の孰か先後為るかを知らざる者有り。

10．1．2　通釈

十数巻の高啓の詩集は郯（タン）郡の徐賁が編集したもので、会稽の王彝がその書物に『高季迪詩集』と題をつけて以下の序文を書いた。

高啓はかつて仕官して顕要な地位に昇ったことがある。まだ仕官していない時から、もう詩名が天下に鳴り響き、世間でその作品を賞賛されたが、それは詩人本人のためであって、官位が高かったからではない。高啓の詩は、官位の高さで世に名が知れ渡ったのではないのである。思うに高啓の詩に対する考えは、必ず漢魏晋唐の作者を基準としており、詩の道が頽廃してしまうことを一番心配している。詩の道は晩唐あたりから最も頽廃し、宋になってまた振るい起こった。しかし元の詩人は、また辺境の砂漠や弓馬の武事に心を奪われ、詩の情はますます消滅してしまった。高啓は自分から時代をさかのぼって古の作者に手本を求め、ただ情によって詩を作った。今ここに漢魏晋唐の作品が高啓の詩といっしょにあり、高啓の作品と比べて見ると、どちらが先でどちらが後かわからないものがある。

10．1．3　語釈

【郯郡】地名。普通は今の山東省南部の郯城県あたりを言うが、徐賁の出身地であることを考えれば、南朝の東晋の時に一時置かれた郯県あたりを指すのかもしれない。そこは今の江蘇省常熟市付近で、明のときには常州府が置かれていた。【徐賁】「鳧藻集本伝」の注を参照。【稽岳】稽山。会稽山。今の浙江省紹興県東南にある。【王彝】「鳧藻集本伝」の注を参照。【傾靡】傾き倒れる。靡は倒れ伏すの意。【沙陲】辺境の砂漠の地。陲は辺境の意。【沈酣】惑溺する。陶酔する。

10．2．0　原文

嗟夫。人之有喜怒愛惡哀懼之發者、情也。言而成章、以宣其喜怒愛惡哀懼之情者、詩也。故情與詩一也。何也。情者、詩之欲言而未言、而詩者能言之情也。然皆必有其節。蓋喜而無節則淫、怒而無節則懥、哀而無節則傷、懼而無節則沮、愛而無節則溺、惡而無節則亂。古之聖賢君子知之、其於喜怒愛惡哀懼之節、所以求之其本初者至矣。故不言則已。言而出焉、喜也而明良之歌作、哀也而五子之歌作、愛也而甘棠作、惡也而巷伯作、懼也而鴟鴞作、皇矣之赫然、又因其怒也而作。

10．2．1　書き下し

嗟夫。人の喜怒・愛悪・哀懼の発する者有るは、情なり。言いて章を成し、以て其の喜怒・愛悪・哀懼の情を宣ぶる者は詩なり。故に情と詩とは一なり。何ぞや。情は詩の言わんと欲して未だ言わざるものにして、詩は言うこと能うの情なり。然も皆必ず其の節有り。蓋し喜びて節無ければ則ち淫し、怒りて節無ければ則ち憾（イカ）り、哀しみて節無ければ則ち傷み、懼れて節無ければ則ち沮（クジ）け、愛して節無ければ則ち溺れ、悪みて節無ければ則ち乱る。古の聖賢・君子は之を知り、其れ喜怒・愛悪・哀懼の節に於いては、之を其の本初に求むる所以の者の至なり。故に言わざれば則ち已む。言いて出だすや、喜びてや明良の歌作り、哀しみては五子の歌作り、愛しては甘棠作り、悪みては巷伯作り、懼れては鴟鴞（シキョウ）作り、皇矣の赫然は又其の怒りに因りて作る。

10．2．2　通釈

ああ！喜び、怒り、愛、憎しみ、哀しみ、恐れの感情が発するのは、人の情からである。それを美しい言葉に表現して、その喜び、怒り、愛、憎しみ、哀しみ、恐れの感情を発露するのは詩においてである。だから情と詩とは一体のものである。何となれば、情は詩によって言い表わそうとしてまだ言っていないものであり、詩は言い表わすことができた情であるからである。しかも必ずそれにはみな節度というものがある。思うに、喜んで節度が無いなら放縦になってしまい、怒って節度が無いなら激怒してしまい、哀しんで節度が無いなら心を傷めてしまい、恐れて節度が無いならくじけてしまい、愛して節度が無いなら溺れてしまい、憎んで節度が無いなら狂い乱れてしまう。古の聖人や賢人や君子はこのことをよく知っており、喜び、怒り、愛、憎しみ、哀しみ、恐れの節度において、これをその感情の根元にまで徹底的に求めたのである。だから言い表わさなければそれまでのこと、言えば詩の表現としてあらわれた。そういうわけで、喜んでは「明良」の歌が作られ、哀しんでは「五子」の歌が作られ、愛しては「甘棠」の歌が作られ、憎んでは「巷伯」の歌が作られ、恐れては「鴟鴞」の歌が作られ、「大いなるかな、明らかなことよ」の歌は、またその怒りによって作られたのである。

10．2．3　語釈

【成章】詩文を作り上げる。『三国志』魏志・陳思王植伝に「言出でて論を為し、筆下りて章を成す」とある。【憾】憤激する。怒り怨む。【哀而無節則傷】『論語』八佾（ハチイツ）篇に「子曰く、『関雎』は楽しみて淫せず、哀しみて傷まず」とある。【沮】落胆してふさぎ込む。しょげる。【明良之歌】上古の時代の夏の皐陶が歌ったという「元首明なる哉、股肱良き哉、庶事康（ヤス）き哉」の歌を指す。『書経』虞書・益稷篇。このことから「明良」が、賢明な君主と忠良な臣下とを指すようになった。【五子之歌】上古の時代の夏の太康が国を失い、五人の弟がそれを怨んで作ったという歌。『書経』夏書に後世の偽作とされる「五子之歌」がある。【甘棠】『詩経』国風召南に収める歌の名。周の時代の召公が南巡した際、その下に休んだ甘棠の木を、召公の徳を慕う人々が記念して歌ったもの。

【巷伯】『詩経』小雅に収める歌の名。讒言をこうむって宮刑にされ、巷伯（宮中の女官を司る小官の長）となったものが、そのことをそしり、戒めとして作った歌（朱熹の説による）。【鴟鴞】『詩経』国風豳風に収める歌の名。周の武王が殷を滅ぼして崩じたあと、後継者の成王を周公が補佐したが、周公が流言を飛ばされ、成王は周公の誠意を知らなかった。そこで周公はこの歌を作って成王に送った。鴟鴞はフクロウ、ミミヅクで、悪鳥とされる。この詩では流言を流した殷の紂の子の武庚にたとえられている。【皇矣赫然】『詩経』大雅・文王之什に収める「皇矣」の歌を指す。歌の冒頭に「皇（オオイ）なる矣（カナ）上帝、下に臨みて赫たる有り」とあるのをこう言ったのであろう。この歌は、天が周の文王に命じて、殷に替っ

て天下に王となるに至らせたことをのべたもの。この歌が怒りによってできたとするのは、歌の後半に「王赫然として斯に怒り」とあるあたりを踏まえるのかもしれない。

10．3．0　原文

蓋方是時、天下有聞而鼓舞之者。或瞿焉以俱喜、或勃焉以俱怒、或悚焉以俱懼、或惻焉以俱哀、或慊焉以同其所愛惡。若有使之然者。此無他。己與人同其情。亦同其節、則所以爲之詩者、非詩也。天下之情之有節者爲之也。夫以其有節者之情、以爲之詩、而詩之節如此其至也。匪聖賢君子、其孰能與於斯哉。故言詩而至於虞周之間、君子以爲後來者之無詩也。然而甚矣。孟子曰「詩亡」、非詩亡也。人之情不亡、詩其可以亡乎。蓋詩云亡者、情與詩無節、則猶無情猶無詩也。

10．3．1　書き下し

蓋し是の時に方り、天下に聞きて之に鼓舞さるる者有り。或は瞿焉（クエン）として以て俱に喜び、或は勃焉として以て俱に怒り、或は悚（ショウ）焉として以て俱に懼れ、或は惻焉として以て俱に哀しみ、或は慊（ケン）焉として以て其の愛悪する所を同じくし、之をして然らしむる者有るが若きなり。此れ他に無し。己、人と其の情を同じくす。亦た其の節を同じくすれば、則ち之が詩を為る所以の者は、詩に非ざるなり。天下の情の節有る者之を為すなり。夫れ其の節有る者の情を以て、以て之が詩を為りて、詩の節此くの如く其れ至るなり。聖賢君子に匪ずんば其れ孰か能く斯に与（アズカ）らんや。故に詩を言いて虞周の間に至り、君子は以て後来者には之（コ）れ詩無きなりと為す。然り而（シコウ）して甚だしきなり。孟子曰く「詩亡ぶ」と、詩の亡ぶに非ざるなり。人の情の亡ばずんば、詩は其れ以て亡ぶべけんや。蓋し詩の亡ぶと云うは、情と詩と、節無ければ、則ち猶お情無きがごとく猶お詩無きがごとければなり。

10．3．2　通釈

ちょうどこの時、天下にこれを聞いて鼓舞された者がいて、あるときには驚きながらともに喜び、あるときには顔色を変えてともに怒り、あるときには身の毛をよだててともに恐れ、あるときには心を傷めながらともに悲しみ、あるときには満足しながらその愛憎を同じくした。あたかもこれをそうさせるものがあったかのようである。しかし、これは他になにかそんなものがあったのではない。自分が他の人とその情を同じくし、またその節度を同じくすれば、それが詩を成立させるゆえんなのである。詩というのは詩そのものではない。天下の情とその節度を持つ人が詩を作るのである。そもそもその節度を持つ人の情をもって、その詩を作ってこそ、詩の節度はこのように備わるのである。聖人や賢人や君子でないならば、いったい誰が詩作に関与することができるだろうか。だから詩を論じて、上古の舜から周の間に至って、後来の者には詩は無くなったと君子が考えたのだが、しかしこれは甚だしい考え方である。孟子は「詩は亡んだ」と言った。しかし詩は亡んだのではない。人の情が亡ぶのでなければ、詩が亡ぶことがありえようか。思うに、孟子が詩が亡んだと言ったのは、情と詩とに節度が無いならば、あたかも情も無く、詩も無いかのようだからであろう。

10．3．3　語釈

【瞿焉】驚喜するさま。【勃焉】怒って顔色を変えるさま。【悚焉】恐れ恐がるさま。【惻焉】傷み悲しむさま。【慊焉】満足するさま。【虞周】虞は中国古代の伝説上の五帝の一人、舜を指す。周は中国古代の王朝名（B. C. 1066-B. C. 256）。【詩亡】『孟子』離婁章句下に「孟子曰、『王者の迹（アト）熄（ヤ）みて詩亡ぶ。詩亡びて然る後に春秋作（オコ）る』」とある。

10．4．0　原文

於是有得詩之情、而復有其節者、世雖漢魏也而猶有古作者之遺意焉。世日遠而情日漓、詩亦日以趨下、則斷自漢魏而後、謂之古作者可也。夫斷自漢魏而可謂之古作者、則晉宋及唐、苟有得夫漢魏之情者焉、謂之漢魏亦可也。而世之作者、乃欲即其無節之情、以爲之詩、至併與其情而遺之、而曰詩固如是。然而漢魏晉唐之作者不爾也。吾固觀夫季迪之詩、而不敢以爲季迪之詩、且以爲漢魏晉唐作者之詩也。

季迪名啓、季迪其字也。其先渤海、今爲蘇州人。生元末、不仕。國朝以儒士與修元史、尋入内府教胄子、授翰林國史院編修官、已而擢爲戸部侍郎、辭不拜、有旨賜歸其郷云。

10．4．1　書き下し

是に於いて詩の情を得て復た其の節を有する者有れば、世は漢魏なりと雖も猶お古の作者の遺意有るがごときなり。世日に遠くして情日に漓（ウス）く、詩も亦た日に以て下に趨（ハシ）れば、則ち断じて漢魏自り後は、之を古の作者と謂うも可なり。夫れ漢魏自り断じて、之を古の作者と謂うべければ、則ち晋宋及び唐は、苟も夫の漢魏の情を得る者有れば、之を漢魏と謂うも亦た可なり。而して世の作者は、乃ち其の節無きの情に即きて以て之が詩を為らんと欲し、併せて其の情と之を遺（ワス）るるに至り、而も詩は固より是くの如しと曰う。然り而して漢魏晋唐の作者は爾らざるなり。吾固より夫の季迪の詩を観て、敢えて以て季迪の詩と為さざるは、且に以て漢魏晋唐の作者の詩と為せばなり。

季迪名は啓、季迪は其の字なり。其の先は渤海、今は蘇州の人為り。元末に生まれて仕えず。国朝儒士を以て元史を修むるに与り、尋いで内府に入りて胄子を教え、翰林国史院編修官を授かり、已にして擢かれて戸部侍郎と為るも、辞して拝さず、旨有りて其の郷に帰るを賜うと云う。

10．4．2　通釈

というわけで、詩の情を得てさらに情の節度を持つものがあるならば、たとえ漢魏の時代であったとしても、なお古の作者の意が残っているかのようである。時代は日々に遠くなってゆき、情も日々に薄くなってゆき、詩もまた日々に下降線をたどってゆくのであるから、すっぱりと断ち切って漢魏以後を、古の作者と言うことも可能である。漢魏以後を断ち切って、これを古の作者と言うことができるのであれば、晋宋および唐であっても、少なくともその漢魏の情を得る者があるならば、これを漢魏と言うこともまた可能である。しかしながら、世の作者たちは節度が無い情にもとづいて詩を作ろうと欲し、さらにその情と節度の両方を忘れてしまうに至り、そして詩はもともとこのようなものだと言う。しかし漢魏晋唐の作者たるものはそうではないのである。私がもともと季迪の詩を見て敢えて季迪の詩だとしないのは、まさしくそれを漢魏晋唐の作者の詩だと見なすからである。

季迪の名前は啓で、季迪はその字である。祖先は渤海の出で、今は蘇州の人となっている。元末に生まれて朝廷に仕えなかった。明朝となってからは、儒士の身分で元史編纂事業に参加し、その後間もなくして宮中に入って貴族の御曹司たちに教え、翰林国史院編修官を授かり、ややあって抜擢されて戸部侍郎となったが、辞退して受けなかった。天子の詔があって故郷に帰ることを許可されたということだ。

10．4．3　語釈

【渤海】今の河北省の滄洲市あたり。【内府】「王禕序」の注を参照。【胄子】「王禕序」の注を参照。【翰林国史院編修官】「凫藻集本伝」の注を参照。【戸部侍郎】「槎軒集本伝」の注を参照。